## 12月4日のメッセージ

聖書:イザヤ書 55: 1-11

## 「わたしの言葉もむなしくは戻らない」

「聖書の言葉に聞く」というと、私たちはすぐに新約聖書のことだと思います。確かにイエスの言葉、パウロやペトロの言葉は私たちの心によく響きます。温かみのある言葉として聞こえてきます。

一方、旧約聖書のイメージはあまり良くありません。恐い神の姿や、失敗して打たれる人間の姿など、聞いていて辛くなることもあります。

しかし、考えてみてください。イエスやペトロやパウロが聞いていた「聖書の言葉」とは何だったでしょう。イエスが安息日に会堂に入り、開かれた聖書とは何だったでしょう。

もちろん、それは旧約聖書です。そして、その言葉の一つひとつが人々を生かす言葉として聞かれていました。なぜなら、「主の命令はまっすぐで、心に喜びを与え/主の戒めは清らかで、目に光を与える。」(詩編19:9)からです。

振り返ってみると、確かに神の言葉はまっすぐです。ノアとの契約では「二度と滅ぼすことはしない」と約束されました(「雲の中に虹が現れると、わたしはそれを見て、神と地上のすべての生き物、すべて肉なるものとの間に立てた永遠の契約に心を留める。」創世記 9:16)。アブラハムには、たとえ高齢であっても子どもが与えられると約束されました(「主に不可能なことがあろうか。来年の今ごろ、……サラには必ず男の子が生まれている。」創世記 18:14)。モーセをしてイスラエルの民を導かせられました(「今、行きなさい。わたしはあなたをファラオのもとに遣わす。わが民イスラエルの人々をエジプトから連れ出すのだ。」出エジプト記 3:10)。そして、神の言葉はいずれも実現し、イスラエルの民はその度ごとに神に感謝を捧げてきたのでした。

ところが、時が経つにつれ、イスラエルの人々は神の言葉に聞こうとしなくなります。自分たちの欲望を神に押しつけるようにさえなります(「今こそ、ほかのすべての国々のように、我々のために裁きを行う王を立ててください。」サムエル記上 8:5)。戦乱の中で、神の言葉をにわかには信じられなくなってしまいました。「もはや望みなどない」。数々の約束が実現しているにもかかわらず、また、預言者たちがどれほど恵みの言葉を語ろうとも、聞く耳を持たなくなったのでしょう。

だからイエスは、そのような人々に向かって「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」(ルカによる福音書 4:21)と宣言されました。聞く耳を持とうと持つまいと、神の言葉はまっすぐで、常に実現に向かって進んでいるのだ、と教えられました。イエスに聞いたパウロも、素直に「かつて書かれた事柄は、すべてわたしたちを教え導くためのものです。それでわたしたちは、聖書から忍耐と慰めを学んで希望を持ち続けることができるのです」(ローマの信徒への手紙 15:4)と受け止めることができたのです。

今、私たちが抱いている希望は何でしょう。それは、神の正義と公平が実現されることでしょう。 そして、残念ながら、未だそれは実現していないように思えています。

しかし、「わたしの口から出るわたしの言葉も/むなしくは、わたしのもとに戻らない」(イザヤ書 55:11)と神は言われます。すでに神は実現に向けて動き出されているのです。

その言葉は私たちの耳に届き、雨が大地を潤すように私たちを満たしています。私たちから正義と公平の芽を生え出でさせ、実を結ばせてくださいます。そして、私たちをして「わたしの望むことを成し遂げ/わたしが与えた使命を必ず果たす」(イザヤ書 55:11)者とされるのです。

だから、今日も私たちは神の言葉に聞くのです。今日の、明日の世界のために。一人でも多くの者が救いと慰めを実感できるようになるために。

